

## 恩師ヨセフ・アガシ\*

立花 希一

Joseph Agassi, My Mentor

Kiichi TACHIBANA

年を取ると過去を振り返る傾向が強くなり、しかも自分の過去を恥も外聞もなく語りたくなるようだが、ご多分に漏れず私もそうである。1980年から1983年までイスラエル政府国費留学生として、アガシのいるテルアヴィヴ大学に留学した。留学の主たる目的は二つで、その一つはポパーの科学哲学および社会哲学の研究を深めることであった。1980年にはポパーは78歳で、大学をすでに定年退職していた。かれに直接師事することはできない相談だったが、ポパーの直弟子たちから学ぶ道が残されていた<sup>1</sup>。そのなかから誰にするかが問題になったのだが、私はアガシによる「ポパー以上にポパーリアンの立場をめざしている」という言葉<sup>2</sup>に惹かれて、かれの下への留学を決意した。当

---

\* 本稿は、日本ポパー哲学研究会ウェブサイト掲載の「世界の批判的合理主義者たち」第四回にあたる、Joseph Agassi に関する拙稿の加筆・修正版である。

<http://www.law.mita.keio.ac.jp/~popper/tachibana2.html>

<sup>1</sup> 日本人でポパーに直接学んだ哲学者には、市井三郎（1922年-1989年）、神野慧一郎（1932年-）がいる。因みに、ポパーの京都賞受賞記念として開催されたワークショップ（1992年11月12日）で論文を読み上げた神野氏は、ポパーから、「神野の論文は極めて優れている（extremely good）」と評された。市井に関するエピソードとしては、私がアガシに初めて面会した際、アガシから「市井を知っているか」と尋ねられ「はい」と答えると、にっこりとし懐かしそうな表情を見せたのを覚えている。かれらは同じ時期にポパーの学生であった。二人とも理学部出身だったので、共通の話が多くあったのだろう。その際、市井の執筆した本を紹介できれば良かったのだが、少なくとも題名を翻訳して伝える機敏すら私は持ち合わせていなかった。市井については、小林傳司、「日本におけるポパー哲学受容の一形態——市井三郎の創造的受容」、小河原誠編、『批判と挑戦』、未来社、2000年、202-244ページ、参照。

その後の世代の研究者は、実にいろいろなポパーの弟子に学んだ。若干、例を挙げると、小河原誠（バートリー、アメリカ）、萩原能久（アルバート、ドイツ）、渡部直樹（ワトキンズ、イギリス）、吉田敬（ジャーヴィ、カナダ）、そして私（アガシ、イスラエル）である。しかも興味深いのは、私も含めそれぞれが、ポパーのそれぞれの弟子の影響を大いに受けてポパー哲学を理解しており、見解・立場に相違が生じていることである。

<sup>2</sup> Joseph Agassi, Modified Conventionalism is More Comprehensive than Modified Essentialism, P. A. Schilpp, ed., *The Philosophy of Karl Popper*, LaSalle IL: Open Court, 1974, p. 693. 因みに、この論文は、Modified Conventionalismの極端な圧縮版で、元の論文は一年後の1975年に、本文でも紹介した *Science in Flux* に収録され刊行された (pp. 365-403)。アガシによれば、1959年の『科学的発見の論理』ではなく1963年の『推測と反駁』において、ポパーは反証主義者 (falsificationist) から検証主義者 (corroborationist) への逡巡的移行を示しており、検証された科学理論の受容が合理的である、という主張に傾斜したという。そもそもの反証主義の立場からは、合理的受容 (rational acceptance) は問題にならず、むしろ理論と経験 (実験・観察結果に関する言明) とが矛盾するという

時、アガシはボストン大学とテルアヴィヴ大学の兼任教授だったので、留学先をアメリカにするかイスラエルにするかの選択肢があったのだが、イスラエルのテルアヴィヴ大学を選んだのには訳があった。私には、もう一つの目的、すなわちポパーのユダヤ的背景を探るといった目的ももっていたからである。ユダヤ人の生活や思想で溢れているイスラエルがうってつけの場所で、テルアヴィヴ大学のアガシの下に留学することは一石二鳥に思われた<sup>3</sup>。ポパーの『開かれた社会とその敵』なくして、私の学問・人生はないと言っても過言ではないが、アガシとの関わりなくしても、その後の教育・研究生活は成立しなかったであろう。高木勘弑（1919年-1993年）が日本における恩師だが<sup>4</sup>、ア

---

意味での反証が具体的に示された理論はそのまま真理と認めることはできないとして拒否するのが合理的であるとみなす、合理的拒否（rational rejection）の見方のほうが重要だという。アガシによれば、「矛盾の認知が合理性の要」なのである。Joseph Agassi, *Science in Flux*, R. S. Cohen and M. W. Wartofsky eds., Boston Studies in the Philosophy of Science, 28, Reidel, 1975, p.138. 率直に言って、私はイスラエルでアガシの見解を理解するまで、検証された科学理論の受容が合理的であるという見解がポパーの反証主義の立場だと思い込んでいた。アガシから学んだこの新たな知見に基づいて執筆したのが、次の注4で言及した拙稿、FALSIFICATIONISM VERSUS CORROBORATIONISM, 1982である。上述の「ポパー以上にポパーリアンである」というアガシの言葉の含蓄はここにあると私は理解している。J. Agassi, *Science in Flux: Footnotes to Popper*, *Science in Flux*, 1975, pp. 9-50. 同じ著書に収録されている、Replies to Diane: Popper on Learning from Experienceも参照（pp. 81-91）。アガシとは対照的に、検証主義をさらに推し進め、科学的研究プログラムの方法論（MSRP）を唱えたのが、ラカトシュである。ラカトシュは自分の方法論がポパーの反証主義を洗練させたものだとして主張したが、ラカトシュによるデュエム＝クワイン・テーゼの扱い方に注目してラカトシュのMSRPが反証主義ではまったくないことを明らかにしたのが、拙稿、「デュエム＝クワイン・テーゼと反証主義」、『批判と挑戦』、2000年、141-178ページ、である。クーンやファイヤアーベントの立場がアンチ反証主義であるのは明白だが、実はラカトシュの立場もアンチ反証主義であることを浮き彫りにしたのが、注21のアガシの著書である。

<sup>3</sup> イスラエルに留学していなかったら、けっして執筆できなかった拙稿はいくつかあるが、もっとも明白なのは次の作品である。「ポパーの反証主義の背景としてのマイモニデスの否定神学」、社会思想史学会、『社会思想史研究』、第11巻、1987年、93-103ページ。修正版は、ポパー哲学会編、『批判的合理主義』第1巻、2001年9月、未来社、所収。テルアヴィヴのユダヤ哲学科（アガシが所属していた哲学科とは別の組織）では、マイモニデスに関する講義は学部1年次の必修であった。

<sup>4</sup> ポパー哲学との最初の出会いをつくってくださったのが高木先生である。私が学部3年次だった1973年、（後に私の卒論の指導教官となる）高木先生が、「これまで私はテキストを使って授業をしたことは一度もないのだが、今回はポパーの科学哲学の主著『科学的発見の論理』をテキストにする」と言われて始めた講義を受講したとき、ポパーの名前を初めて知ったからである。イスラエル留学を後押ししてくださったのも高木先生だし、後年知った事実なのだが、私の最初の本格的論文とも言うべき、注2で言及した、拙稿、FALSIFICATIONISM VERSUS CORROBORATIONISMを、英語論文でありながら、筑波大学哲学・思想学会の学術雑誌、『哲学思想論叢』への掲載を認めるよう支援してくださったのも高木先生であった。私が論文投稿した『哲学思想論叢』創刊号には、英語論文の投稿規定がなかったのだ。『哲学思想論叢』、筑波大学哲学・思想学会、第1巻、1982年、pp. 67-78. タイポ修正版は下記のアドレスから閲覧可能である。

ガシはそれと同等かそれ以上の恩師である<sup>5</sup>。

ヨセフ・アガシ (Joseph Agassi) は、1927 年、現在のイスラエル (当時は英国の委任統治領) に生まれた。宗教的シオニストであった父親は東欧からイスラエルへの移民の一人であった。宗教的な家庭に生まれたヨセフは、宗教学校に入れられたが、しばらくしてユダヤ教に疑問をもち、学校を退学する。宗教に対する懐疑は、かれを哲学へと向かわせたが、大学に入学する際には、哲学の理解を深めるという目的のために、物理

---

[https://f3cf63f9-a5fa-47a7-8b5b-859966dd92ef.filesusr.com/ugd/070434\\_7eccad9ad61e4fbbdb43b8cf5a518a1b7.pdf](https://f3cf63f9-a5fa-47a7-8b5b-859966dd92ef.filesusr.com/ugd/070434_7eccad9ad61e4fbbdb43b8cf5a518a1b7.pdf)

<sup>5</sup> テルアヴィヴ大学には3年在籍したが、先にも述べた通り、アガシは半年ボストン大学、半年テルアヴィヴ大学だったので、アガシから指導を受けたのは実質1年半で、半年毎の飛び飛びでもあった。しかも、イスラエルの院生たちの間では、当たり前のようにアガシを愛称・渾名の「ヨスケ」で呼び、相互にフランクに付き合っていたのだが、25歳も年長でしかも指導教授であるかれを名前で呼ぶことなど、私にはまったくできなかつたし、ましてや渾名で呼ぶことなどできるわけがなかつた。私の3年間の留学生活は思ったほど成果を挙げることができなかつたのは、哲学の問題に取り組むうえでは、先生も学生もない対等な関係を築くことができなかつたことが大きな原因ではなかつたかと思えてならない。

因みに、ソクラテスは、議論に参加する意思のあるひとなら誰とでも無償の議論を行ったが、そのなかには、プラトンなど多くの若者もいた (ソクラテスとプラトンの年齢差は47歳である)。プラトンの作品を通して見る限り、ソクラテスと若者たちとの対話では、互いに丁寧に明晰な言葉は使われているが、当然、尊敬語や謙譲語は使用されていない。しかも、意見が異なる同士の間でも、つねにはないが、相互の尊重や信頼は醸成されている。ところが、『プラトン全集』の翻訳では、不思議なことにまるで日本人同士の会話のように、年少者はソクラテスに敬語で話しているのだ。

日本では敬語 (尊敬語・謙譲語) の使用を当然視する伝統的規範が私の足を引っ張ったと言いたくなってしまふ。学問をめざす子どもたちのために、日本語の翻訳でも、敬語表現など用いずに、古代アテネにおけるかれらの実際の対話を生き活きと再現する工夫がなされてしかるべきかもしれない。

2000年に香港大学から招聘されたアガシ夫妻が、そのついでとして10月7日に来日し、17日の離日まで講演活動等で東京、京都、東京、秋田、東京を旅行した。その期間中、私はずっとかれらに同行したのだが、その間によく、「ヨセフ」、「ユディット」と呼べるようになった。「郷に入れば郷に従え」と口で言うのは易しいが、行うのは私にはとてつもなく難しかったのである。

こうしてイスラエルでは当たり前の師弟関係に至るのに実に20年も要してしまつた。これをきっかけにその後は、主として電子メールによるものだが、アガシとのコミュニケーションを驚くほどスムーズに行えるようになり、今日に至っている (2002年にウィーンで開催されたポパー生誕記念国際学会 (ポパー・コンGRESS 2002) で再会でき、しかも私の研究発表をわざわざ聞きに来てもらえたし、さらに2003年10月22日から25日までの台湾でのアガシの講演活動にも同行し、哲学上のいろいろな話をする事ができた)。2000年は私にとって決定的な年であった。ポパー・コンGRESS 2002で発表した原稿に加筆・修正し完成した拙稿が、Can the Japanese Learn to Welcome Criticism Openly?, Ian Jarvie, Karl Milford and David Miller eds., *Karl Popper A Centenary Assessment*, Ashgate, Vol. I, pp. 203-215. である (因みに、この論文名もアガシが提案してくれた複数の候補のなかから私が選んだものである)。

学を選んだ。しかし、当時のかれの物理学の教師たちは、約束主義の影響を受け、物理学を応用数学の一種とみなし、哲学とは無関係の学問として扱っていた。こうした態度に失望していたアガシは、カール・ポパーの論文「哲学的諸問題の性格と科学におけるその根源」(1951年)を読んで感動し、ポパーの下で研究することを決心する<sup>6</sup>。ヘブライ大学で修士号(M. Sc.)を取得(1952年)後、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学する(1953年)。ポパーの指導の下、The Function of Interpretation in Physics(「物理学における解釈の機能」という論文で、博士号(Ph. D.)を取得する(1956年)。この学位論文における「解釈」というのは、「形而上学的解釈」ないし、「形而上学」ということであり、当時、有力であった帰納主義と約束主義という二つの考え方では排除されていた形而上学が科学の研究に大きな役割を果たすことをファラデーの事例研究を中心に論じたものである。この論文が基になって、1971年に*Faraday as a Natural Philosopher*<sup>7</sup>(『自然哲学者としてのファラデー』)として結実し、科学史家としての地位を確立することになる。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスでポパーの助手を務めた後、1960年、香港大学に赴任する。イリノイ大学、テルアヴィヴ大学、ボストン大学、カナダのヨーク大学(トロント)を歴任し、現在は、テルアヴィヴ大学・ヨーク大学名誉教授である。かれの専門分野、関心は、自然科学・社会科学の方法論、科学史はもとより、物理学、形而上学、技術論、精神病理学、人間学、教育理論、宗教思想、民族問題など多岐にわたっている(ジャーヴィとラオールはアガシを「オールラウンダー」と評している<sup>8</sup>)。各方面における著書、編著書、共著書、論文など膨大な数にのぼるが、その詳細については、<https://www.tau.ac.il/~agass/pub.html>を参照していただきたい。ここでは英文の主要著書(単著)に言及しながら、かれの思想を紹介することにしよう。

香港大学に赴任してまもなく、1961年に*Towards an Historiography of Science*(『科学の歴史記述に向けて』)を書き上げる(出版されたのは1963年)。この本のなかで、

---

<sup>6</sup> Karl R. Popper, *The Nature of Philosophical Problems and their Roots in Science, Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, London: Routledge and Kegan Paul, 1963, pp. 66-96. アガシは後(1964年)に、*The Nature of Scientific Problems and their Roots in Metaphysics*(科学的諸問題の性格と形而上学におけるその根源)という論文を書いている。J. Agassi, *The Nature of Scientific Problems and their Roots in Metaphysics*, *Science in Flux*, Boston Studies in the Philosophy of Science, Vol. 28, 1975, pp. 208-239. これはアガシによるポパーの下での研究を決断させたポパーの論文、「哲学的諸問題の性格と科学におけるその根源」を振ったもので、一見するとポパー論文とはまさに対照的な主張に思えるが、私見では、対立というより科学と形而上学(哲学)のどちらに焦点をあてるかという重点の相違であるように思われる。

<sup>7</sup> J. Agassi, *Faraday as a Natural Philosopher*, Chicago: Chicago University Press, 1971.

<sup>8</sup> I. C. Jarvie and Nathaniel Laor, *The Philosopher as All-Rounder*, I. C. Jarvie and Nathaniel Laor eds., *Critical Rationalism, Metaphysics and Science*, Kluwer Academic Publishers, 1995, pp. xi-xxii.

従来、科学史家が科学の歴史を書く際に意識的あるいは無意識的に採用している科学哲学として帰納主義と約束主義を挙げ、その問題点を指摘しながら、ポパーの反証主義という第三の立場による歴史記述の方法を提示したものである。出版はクーンの『科学革命の構造』の一年後であるが、シルプ編、『カール・ポパーの哲学』のなかで、寄稿者の一人、J. O. ウィズダムが、アガシの『科学の歴史記述に向けて』とクーンのそれに言及して「この二書が最も斬新かつ重要なこの分野における貢献である」と高く評価している<sup>9</sup>。

次に出版されたのは *The Continuing Revolution: A History of Physics from the Greeks to Einstein*、1968 である<sup>10</sup> (拙訳、ヨセフ・アガシ、『科学の大発見はなぜ生まれたか』、講談社ブルーバックス、2002 年)。かれの歴史記述の立場は、ポパーの反証主義と、E. A. バートや A. コイレの立場——科学は形而上学の枠組のなかで発展していくものとして理解するもの——との総合をめざすものであり、科学的研究によって批判可能なくつかの形而上学的枠組が競合する歴史として物理学の歴史を捉えようとする立場である。本書はかれの息子との対話という体裁をとっており、中身を読まない子供向けの通俗書として受け取られてしまう恐れがある。しかし、学術的にも十分批判に耐えるものになっている。むしろ、高度に学術的な作品が、青少年にも手が届くように工夫されていると考えた方が適切であろう。

ボストン大学で10年間教鞭をとった後、かれの主要論文が *Science in Flux* (『流動する科学』) というタイトルで1975年に、*Boston Studies in the Philosophy of Science* の一書として出版された。因みに、*Boston Studies in the Philosophy of Science* は科学哲学において世界をリードする書物を多く輩出しているシリーズであるが、この著作はそのなかでもとりわけ成功した作品の一つである。科学を高度に批判的で創造的な営みとみなす点、形而上学の強調に特徴があるが、他方、科学の社会的役割、責任にも目を配っている点にも特徴がある。

イスラエルの Van Leer Jerusalem Foundation での講演を基にまとめられた *Towards a Rational Philosophical Anthropology* (『合理的な哲学的人間学に向けて』) は1977年に出版された<sup>11</sup>。本書は、ギリシャ以来の二分法的発想をオール・オア・ナッシングの見方として退け、それに代わって、モア・オア・レスから出発してモアをめざしていくという積極的な見方を、物理学、生物学、哲学、社会科学、神学などといった多分野において提唱するという大胆な、画期的な企てである。あまりに大胆な企てのため直ちに理解されるものではなく、今後、次第に論議が高まっていくものと期待される。

1981年に *Boston Studies in the Philosophy of Science* から出版されたかれの二

<sup>9</sup> J. O. Wisdom, *The Nature of 'Normal' Science*, P.A. Schilpp, ed., *The Philosophy of Karl Popper*, LaSalle IL: Open Court, 1974, p. 820.

<sup>10</sup> J. Agassi, *The Continuing Revolution: A History of Physics from The Greeks to Einstein*, New York: McGraw Hill, 1968.

<sup>11</sup> J. Agassi, *Towards a Rational Philosophical Anthropology*, The Hague: Kluwer, 1977.

つ目の論文集である、*Science and Society: Essays in the Sociology of Science* (『科学と社会：科学社会学に関する論文』)<sup>12</sup>は、科学の社会的側面をさらに考察し、学問の世界の運営が権威主義的ではなく、より民主主義的なものになれば、科学はさらにより良きものになり、人道的になるということを論じたものである。

Boston Studies in the Philosophy of Science から刊行された第三作目が、*Science and Culture*, 2003 (『科学と文化』) である<sup>13</sup>。これまで執筆してきた数多くの論文のなかから、自律、寛容、理性、哲学、責任というキーワードの下に精選された論文で構成されている。知性主義(反経験主義)、経験主義(帰納主義)、道具主義の科学観を退け、ポパー流の批判主義的科学観を採用したうえで、個人の自律、リベラリズム、多元主義、デモクラシーと科学との関わりを考察している。

Boston Studies in the Philosophy of Science から刊行された第四作目として、上述の *Towards an Historiography of Science*, 1963 を再掲すると共に歴史記述に関わる論文が付加された *Science and Its History: A Reassessment of the Historiography of Science*, 2008、(『科学とその歴史：科学の歴史記述再考』) があり、第五作目には、*The Very Idea of Modern Science: Francis Bacon and Robert Boyle*, 2013 (『近代科学の観念：フランシス・ベーコンとロバート・ボイル』) がある。

アガシは学界にデビューするのに、書評の分野において書評を学問にまで高めるといふ貢献が大きく寄与したが、かれのこれまでの書評のうち重要なものを集めて一書となった極めて稀な書が、1988年に出版された、*The Gentle Art of Philosophical Polemics*, (『哲学的論争の作法』) である<sup>14</sup>。このなかでかれは模範的な哲学的議論を示している。

最新の著書、*Academic Agonies and How to Avoid Them*, Social Epistemology Review and Reply Collective, 2020 (『学術上の苦悩とその回避策』) からもわかるように、アガシは特に近年顕著に、さまざまな事象をモア・オア・レスという程度問題として把握しようとする従来からの立場に依拠し、エリートと大衆とか知識人と素人とかといった二分法を退け、学問の世界と社会一般の垣根を可能な限り取り払って、民主社会において、いわゆる文系・理系を問わずさまざまな知的活動を相互交流させ、活性化させるため、ともすれば権威主義的で閉鎖的になりがちな学界をさらにリベラルで開かれた社会へと改革するための方策を研究・提言している。同書は、こうした実践的活動の一環として、興味のあるひとなら誰でもオンラインで読めるように提供されている (<https://social-epistemology.com/2020/10/19/table-of-contents-academic-agonies-and-how-to-avoid-them-joseph-agassi/>)。因みに、拙訳『科学の大発見はなぜ生ま

---

<sup>12</sup> J. Agassi, *Science and Society: Studies in the Sociology of Science*, Boston Studies in the Philosophy of Science, Vol. 65, 1981.

<sup>13</sup> J. Agassi, *Science and Culture*, Boston Studies in the Philosophy of Science, Vol. 231. 2003.

<sup>14</sup> J. Agassi, *The Gentle Art of Philosophical Polemics: Selected Reviews and Comments*, LaSalle IL: Open Court, 1988.

れたか』の「日本のみなさまへ」の言葉にも、アガシのアカデミズム打破の姿勢が滲み出ている<sup>15</sup>。

その他、科学と技術の峻別、公害等環境問題の科学に基づく技術的解決の可能性、環境問題のグローバルな視点からの把握・対策を訴えている *Technology: Philosophical and Social Aspects*, 1985 (『テクノロジー：哲学的・社会的側面』)<sup>16</sup>、哲学入門書としては個性的な *The Siblinghood of Humanity: Introduction to Philosophy*, 1990 (『人類皆同胞：哲学入門』)<sup>17</sup>、量子力学の展開を扱った、*Radiation Theory and the Quantum Revolution*, 1993 (『放射理論と量子革命』)<sup>18</sup>、ポパーの伝記的作品である、*A philosopher's Apprentice*, 1993 (『哲学者の弟子』)<sup>19</sup>、民族問題を扱った、*Liberal Nationalism for Israel: Towards an Israeli National Identity*, 1999 (『イスラエルにとってのリベラルなナショナリズム』)<sup>20</sup>、ポパーの反証主義に対する批判を批判的に検討する、*Popper and his Popular critics: Thomas Kuhn, Paul Feyerabend, Imre Lakatos*, 2014 (『ポパーと通俗的なポパー批判者たち：トマス・クーン、ポール・ファイヤアーベント、イムレ・ラカトシュ』)<sup>21</sup>、教育論に関する論考等を収録した、*The Hazard Called Education by Joseph Agassi: Essays, Reviews, and Dialogues on Education from Forty-five Years*, 2014 (『教育に潜む危険要素：45年にわたるアガシの教育に

---

<sup>15</sup> 因みに、「哲学は、講壇哲学ではなく市井の哲学でなければならない」が高木先生の口癖で、かれもまた権威主義的で閉じたアカデミズムに反対であった。

<sup>16</sup> J. Agassi, *Technology: Philosophical and Social Aspects*, Dordrecht: Kluwer, 1985.

<sup>17</sup> J. Agassi, *The Siblinghood of Humanity: Introduction to Philosophy*, Delmar NY: Caravan Press, 1990.

<sup>18</sup> J. Agassi, *Radiation Theory and the Quantum Revolution*, Basel: Birkhäuser, 1993.

<sup>19</sup> J. Agassi, *A Philosopher's Apprentice: In Karl Popper's Workshop*, Series in the Philosophy of Karl R. Popper and Critical Rationalism, Amsterdam: Rodopi, 1993.

<sup>20</sup> J. Agassi, *Liberal Nationalism for Israel: Towards an Israeli National Identity*, Jerusalem and New York: Gefen, 1999. 拙稿、「民族主義の倫理的一考察---K. R. ポパーの民族問題に関する発言を手掛かりとして---」、『秋田大学教育学部研究紀要』、第38集、1988年、23-32ページも参照。因みに、この拙稿は、1987年イスラエル大使館エッセイコンテスト入賞作品の加筆・修正版である。アガシは、イスラエルをユダヤ人国家にするのではなく、イスラエルがより民主的でリベラルなナショナリズムをめざすよう提案している。同様に、私は、拙稿で、ポパーの開かれた社会と両立可能な民族主義を、両立不可能な「全体主義的民族主義 (Totalitarian Nationalism)」と対比させて、「個人主義的民族主義 (Individualistic Nationalism)」と呼び、後者が、ポパーが看過したりベラルな民族主義であると主張した。2000年に来日した際、アガシは秋田大学も訪れたが、私の研究室で、テーブルに置いてあった拙稿をたまたま見つけて直ちに Abstract に目を通し、ナショナリズムについて「われわれは同様の見解のようだ」というコメントをしてくれた。拙稿は、以下のアドレスからアクセスして読むことができる。

[https://air.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=1175&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://air.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1175&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

<sup>21</sup> J. Agassi, *Popper and his Popular critics: Thomas Kuhn, Paul Feyerabend, Imre Lakatos*; Cham, Switzerland, Springer Briefs in Philosophy, 2014.

関するエッセイ、書評、対話』)<sup>22</sup>、批判的合理主義の立場からヴィトゲンシュタインの思想を考察した、*Ludwig Wittgenstein's Philosophical Investigations: An Attempt at a Critical Rationalist Appraisal*, 2018 (『ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの哲学探究：批判的合理主義的評価の試み』)<sup>23</sup>等がある。

2017年にはアガシ生誕90年を記念した論文集が出版され<sup>24</sup>、拙稿、How can we attain both democracy and constitutionalism?<sup>25</sup>も収録されているが、この年は私の定年退職の年度でもあり、私にとってもいい記念になる論文集の刊行であった。2020年10月の時点で近刊予定論文が5本と、アガシは93歳の現在も尚、精力的に執筆活動をしている。

2020年12月28日最終更新

---

<sup>22</sup> J. Agassi, *The Hazard Called Education by Joseph Agassi: Essays, Reviews, and Dialogues on Education from Forty-five Years*, Ronald Swartz and Sheldon Richmond eds., Sense Publisher (Springer), Rotterdam, 2014.

<sup>23</sup> J. Agassi, *Ludwig Wittgenstein's Philosophical Investigations: An Attempt at a Critical Rationalist Appraisal*, Synthese Library, 401, Springer, 2018.

<sup>24</sup> Stefano Gattei and Bar-am Nimrod eds., *Encouraging Openness: Essays for Joseph Agassi on the Occasion of His 90th Birthday*, Boston Studies in the Philosophy and History of Science, Springer, 2017.

<sup>25</sup> Kiichi Tachibana, How can we attain both democracy and constitutionalism?, *Encouraging Openness: Essays for Joseph Agassi on the Occasion of His 90th Birthday*, 2017, chapter 26, pp.305-318. この拙稿の私訳「民主主義と立憲主義」は以下のアドレスからアクセスして読むことができる。

[https://f3cf63f9-a5fa-47a7-8b5b-859966dd92ef.filesusr.com/ugd/070434\\_b64ba648fec04c009264d7cdece17cff.pdf](https://f3cf63f9-a5fa-47a7-8b5b-859966dd92ef.filesusr.com/ugd/070434_b64ba648fec04c009264d7cdece17cff.pdf)